S. A. Epstein, *Purity Lost: Transgressing Boundaries in the Eastern Mediterranean, 1000–1400*

高田良太

中近世東地中海世界の民族に関心をもつ歴史家にとって、しばしば一次史料の読解以上に大きな問題となるのが、先行研究の解釈である。各国・各地域に残された中近世の民族集団についての記録と記憶は、しばしば近代以降の政治・外交・教育の中で利用され、増幅されながら「国民」のアイデンティティの一角を担ってきた経緯がある。そして、地域研究を行うときに各国史にあたることの多い我が国の研究者もまた、このような国民史学の影響を少なからず受容してきた。

こうした国民史学のもつバイアスをはっきりさせるうえで有効なのは、社会史的・人類学的な手法であろう。とりわけ一九九〇年代以降、多くのアメリカ人研究者が長期の留学と丹念な史料調査を踏まえた著作を公刊している。その結果、史料調査は現地研究者にまかせ、史料の斬新な解釈によって研究史を塗り替えることに役割を見出す、といったかつてのアメリカ人研究者像は大きく様変わりしつつある。そこで、本稿では近年のアメリカにおける研究動向の性格を反映する評書の紹介を通じて、アメリカ人による地中海研究を読むことが、日本人が東地中海史研究に取り組むうえで、どのような意義をもつのかを考えてみたい。

本書の著者、S・A・エプシュタインは一九八一年にハーバード大で博士号を取得し、現在はカンザス大学特別教授の職にある。その学問的キャリアの出発点は都市社会史にあり、はじめて公刊された著書はジェノヴァ国立文書館に収蔵された遺言書史料についての詳細な研究であった。[1] 次いで、労働者の労働形態や紐帯へとその興味を転じて、中世ヨーロッパを対象とした概説書を著している。[2] こうしてつちかわれた社会史の手法は次作『ジェノヴァとジェノヴァ人――九五八―一五二八年――』において存分に生かされ、著者は政府や会社組織の行動原理を社会史的観点から詳細に検討し、中世ジェノヴァ人商人の活発な移動を支えるさまざまな公的制度や非制度的慣行の存在を浮き彫りにした。[3] その後は、中世イタリアの海港都市を中心とした奴隷制、マイノリティ、人種差別の問題に関心を移している。[4] このように、著者は一貫して社会史家としてキャリアを積んできた研究者であり、二〇〇六年に著者の五作目の単著として世に送り出された本書においてもまた、社会史にその主眼が置かれている。

具体的な論評に入る前に、まずは本書の構成を示す。次いで章毎の要約を行い、各章の内容について評者の意見を述べる。最後に、本書全体に貫かれる著者の問題意識および主張を検討し、評者に課せられた責務を果たすことにしたい。

序章
第一章　差異を認識する

第二章　群島（archipelago）における異民族の共生関係
第三章　条約と外交
第四章　越境者たち、日和見主義者たち
第五章　人間の顔、天使の顔
終章

本書を開くと、イタリアの現代作家イタロ・カルヴィーノの『見えない都市』最終章の引用が目に飛び込んでくる。マルコ・ポーロが主君のフビライ・カンに対して、自身がこれまで見聞きしてきた、さまざまな不思議な都市のことをとりとめもなく語りかけるこの幻想的な文学作品は、二人が対話によって、探索の「最終の到達点が地獄の都市以外にあり得」ないといいながら、その地獄とは実は「われわれがともにいることによって形づくっている」ことにすぎないと達観する印象的な場面で幕引きを迎える。[4] 著者は、この地獄という言葉に東地中海世界における民族の共生mixingという本書のテーマを重ね合わせながら、序章を書き起こす。著者によれば、H・ピレンヌやF・ブローデルの著書、またP・ホールデンとN・パーセルらの近著によって叙述されてきた中近世地中海海世界の通史では、世界は常に東西あるいは南北にわけられ、それぞれの文明の間の精神的交流や物質的交換は、各文明が固有の純粋な価値観をもつとする前提に従って理解されてきた。こうした歴史理解の中では、文明や民族の間の関係そのものを考える視点は欠けており、とくに共生関係にはあまり関心がはらわれてこなかった。しかし、東地中海世界の歴史を正しく理解するうえでは、肌の色、言語、宗教といった差異がどのように乗り越えられていたのかを明らかにすることが重要な意味をもつはずであり、そうした越境研究の進展によって、固有の文明の純潔を前提とするこれまでの理解に大きな疑問を投げかけることになるとする。著者は再びカルヴィーノを引いて以下のように序章を締めくくる。「安らぎの場所を求める人々はいただろう。だからといって、安らぎの場所を求めることができなかった人々が直面していた状況は、イタロ・カルヴィーノが想像していたような、地獄であると単純に言い切れるのか」と。すなわち、著者は、中世の地中海に生きた人々が単一の価値観のみで生活していくことは極めて難しかったことは認めつつも、そうした状況が地獄に例えられる不幸であったとするイタリア人作家の姿勢に疑問を投げかける。このように、著者は基本的には民族の関係を相対的にとらえて、民族の差異を絶対視する伝統的な中世東地中海像の見直しを主張している。こうした、著者の姿勢はどのように具体的に説明されているのか、そして考察の結果、どのような東地中海世界像が浮かびあがってくるか。まずは、各章を検討してみよう。

第一章では、著者はおもに叙述史料にもとづき、同時代人による民族の差異の認識をめぐる議論が展開される。著者が重視するのが、視覚的に認識される差異であり、具体的には肌の色をめぐる認識である。シバの女王伝説や『黄金伝説』のエジプトのマリアの説話のように、もともと聖書にもとづく世界認識の中では、肌の麻黒さは必ずしもキリスト教世界にとって「他者」を意味しなかった。それが、反セム主義と結びついていくのは、中世における異教徒との接触を通じてであるという。そして、異教徒に対する見方も、時代、地域、個人を取り巻くコンテクストによって

異なっている以上、視覚情報に従ってイスラーム、ユダヤ人、タタール人に対するイメージがステレオタイプ化されていく過程は、単線的な図式によっては描けないことを強調する。ただし、このように著者は差別意識と視覚認識の関係を強調するのであるが、他者認識は必ずしも視覚によってのみなされるのではなく、音声認識やコミュニケーションの問題も大きく関係している。話し言葉の違いに根ざした差別意識や、うわさから生じる「仲間外れ」も、著者の提起との関連性のもとで検討されてしかるべきであろう。

第二章で扱われるのは、実際の共生社会の状況である。章題では群島 archipelago という表現がもちいられているが、実際には黒海沿岸の陸上の都市も含まれている。ここでの意味は、民族共生の事例を点として積み重ねることで、帰納的に当時の社会状況に迫ろうという著者の立場の表明であろう。そして、本章では夥しい数の事例を示して、商取引、結婚、奴隷と主人の主従関係といった、社会・経済のさまざまな面で民族間の交流が日常的であったことを強調している。こうした事例研究の厚い壁がある以上、エスニシティの点から見て純粋な民族集団を前提として東地中海世界に関わる研究を進めることは、もはや不可能であろう。また、用いる史料についても、本章は新しい視点を提供している。分析に用いられている史料のほとんどは、ラテン語、イタリア語、ヘブライ語の公証人文書やそれにもとづく研究文献であるが、裁判史料もまたエスニシティを理解するための重要な鍵として用いられている。著者によれば、ラテン語、イタリア語、アラビア語といった支配者の言語で執り行われる法廷は、ギリシア人やユダヤ人といった被支配者である民族集団によっても利用されていた。この事実は、宗教や言語とならんでエスニシティを支える要素である法もまた、民族を分ける境界として機能していたと単純に考えることができないことを如実に示している。その一方で、民族間の交流を示す史料のみが取り上げられていることには違和感も残る。逆に、民族集団内部の閉鎖性を示す史料のみを抽出して分析することにより、著者の主張とは正反対の結論を導くことも可能になってしまうのではないだろうか。何らかの方法によって、民族の交流を示す史料と、民族集団の閉鎖性を示す史料との質的、量的な比較を行う必要があっただろう。

第三章に移る。ここで取り上げられるのは、自国人の海外での活動を保護するために必要な居留地の建設に際してなされた、国家間の交渉のプロセスとしての外交と、その結果として締結された条約についての分析である。ここでの考察の中軸となるのはジェノヴァ＝ビザンツ関係であり、一一五五年のジェノヴァとビザンツ帝国の間の条約締結にはじまって一四世紀初頭までの両国の外交史を再構成する中で、著者は両者が付かず離れずの関係を構築していったことを示す。ジェノヴァ人の経済活動や輸送力は帝国にとってもジェノヴァにとっても無視できるものではなく、したがって双方には、帝国内のジェノヴァ人の居住権を認める最低限の利害の一致があり、そのうえで、両者は政治情勢の変化にしたがって協調と敵対とを繰り返していたとする。この指摘自体は、先行研究においても前提とされていることで、とりたてて新しいものではないが、本書はさらに東地中海の政治・外交秩序を同様の原理によって説明しようとしている。諸勢力が絶え間なく同盟

関係を変化させながら、軍事的衝突を繰り返す東地中海世界の政治秩序は、長く芳しい評価を与えられてこなかった。それを著者は、共生の維持を前提としてルールを定め、各参加者が最大の利益を取ろうとするゲームととらえることで積極的な意義を見出すことに成功している。尚、本書の考察はジェノヴァやヴェネツィアをはじめとしたイタリア海港都市を中心になされているが、イタリア都市が関わらない場合であっても、同様の政治秩序は想定できると評者は考える。たとえば、アンドロニコス三世以降のビザンツ帝国最末期の政治史は、かつては内乱、混迷、衰退の歴史と見なされてほとんど評価されてこなかったが、近年ではむしろオスマン帝国を含めた諸外国との間の密な政治的コミュニケーションのなかで環エーゲ海の秩序が維持されていた点が再評価されつつある。

続いて第四章では、個人の意志による越境の問題がとりあげられる。とくに、イスラーム、キリスト教、ユダヤ教の間の境界に焦点をあてて、民族集団からの離反者や、内部の日和見主義者たちが元の宗派を捨てて改宗に至った経過と背景を個別に説明している。こうした改宗者の多くは、原史料の多くでは棄教者として強い非難を浴びせられているが、著者はむしろ社会史家として改宗者の存在を高く評価する。なぜなら、こうした改宗者のほとんどは奴隷、従者といった低い身分の出身者であり、そこでは民族集団の閉鎖性が強い。もともとの集団との間に軋轢をかかえたときには行き場がなくなってしまうが、この時、改宗を行うことによって新しい民族集団の中で生活をやりなおすことができた。こうした動きをとらえて著者は、宗教的な境界は存在していたのだが、その境界を逸脱する人々をも受け止めて救済する、超宗派的な枠組みが形成されていたとする。ただし、このような越境者の社会史の成否をめぐっては疑問も生じる。評者が専門とするクレタ島におけるカトリックと正教会の間の境界に関して述べておくと、そこでは改宗者の存在はほとんど確認できない。また、ラテン人家庭に入ったギリシア人の奴隷や使用人の場合でも、正教の信仰を保持しているとみられる場合がしばしば見受けられる。このように、改宗が一般的ではなかった地域についてどう考えるのかについては、今後の課題になるだろう。

こうした特定の宗教、法、政治的共同体などへの帰属意識についての議論ののち、著者は再び身体論に戻る。その中でも、もっとも重要な要素として第五章で取り上げられるのが、人相学である。顔つきによる善悪の判断は古今東西を問わず広く見られるが、中世の地中海においてその認識の核になったのは、『黄金伝説』に典型的にあらわれる聖者の身体的な特徴であった。また、キリスト教世界のみならず、ユダヤ人やイスラームにおいてもこの人相学的認識はある程度共有されていた。それは、天使と悪魔の相貌（キリスト教の聖画像で言えば、図像が作成された土地の人間の顔に似せられる天使の顔に、一様に黒い姿の悪魔が対置される）によって善悪を二分してとらえる認識の枠組みが、三つの宗教の間で共有されていたからである。人相学的認識は地域によってまた民族によって変わりうる性格をもつが、その基本的な枠組みは宗教を越えて共通していたと著者は主張して、「他者」の線が地中海世界の枠組みの外側に引かれていたことを強調する。ただし、前章までの議論でしばしば共生の対象として取り上げられ

ていたタタール人が、本章ではまったく触れられていない。著者の主張する人相学的認識にもとづく共属意識の限界線は、東方ではどこに引かれていたのか、やや肩すかしを受けた感がある。

結論部において、著者は、一四〇〇年代までの地中海世界において、民族を規定する文化的要素の絶対性を否定する自らの立場をあらためて強調する。むしろ、各地域は民族の共生を前提として組み立てられていたのであり、そこでは、各地の政治的・社会的安定のための妥協と同意が、しばしば純粋な規範の遵守に優先し、また二つの宗教の狭間におかれた人間が改宗を選択することも珍しくはなかった。このようないわば相対主義的な民族認識を主張して、民族の純粋性を前提として寛容・非寛容の問題を論じようとする中近世エスニシティ研究に対して、疑問をなげかけながら本書は結ばれる。

続いて、本書の主題にかかわる問題や、その背景を考えてみることにしたい。本書は、一次史料に基づくオリジナルの研究の要素は少ないとはいえ、中世東地中海のエスニシティに対する伝統的な議論の見直しという点で大きな意味をもつ。単一で純粋な民族集団の発生と成長の過程を再構成することを目的とする国民史学に対して、民族を越えた共通のコミュニケーションが成り立つ政治的・制度的・心理的な基盤が用意されていたことを新たな前提として、地域社会、国政、国際関係を捉え直そうとする姿勢は、近年のイタリア海港都市史、ビザンツ史、オスマン史の研究動向にも棹さしている。本書は最新の研究成果を俯瞰することで、近年の研究の問題関心が相対主義を軸に様変わりしつつあることを如実に示している。

ただし、評者は著者の考える相対主義に全面的に賛同することはできない。それは二つの理由による。ひとつには、すでに見たように、改宗や棄教によって民族の垣根を越えるという選択肢は可能ではあったかもしれないが、多くの人々にとって実現可能な手段であったとは考えにくいことである。いまひとつは、事件史と民族認識との関わりである。本書では一〇〇〇年代から一四〇〇年代までをひとつの画期ととらえて、時系列による叙述スタイルを極力排している。しかし、本書で示されるような静態的な図式の中では事件に伴って突発的に巻き起こる差別意識を理解することはできないのではないだろうか。以上の理由によって、東地中海世界における民族共生社会は、アイデンティティが純粋であったか相対的であったかを問うことによって理解できるものではないと、評者には思われる。むしろ、様々な歴史的局面に応じた純粋性と相対性の使い分けを明らかにすることによって、初めて理解されるのではないだろうか。

冒頭の地獄をめぐる解釈についても、評者は、カルヴィーノが批判を受けるいわれはなかったのではないかと考える。なぜなら、カルヴィーノがマルコ・ポーロに語らせた予定調和としての地獄とは、必ずしも理想郷ではないが、それでも可能な限りの妥協の中で生まれた最善の場所としての現実にほかならないからである。中世の東地中海の民族共生社会もまた理想からはほど遠い、各民族集団の共存への努力の中で見出された最適解であったのだろう。この点において、評者には、地中海人であるカルヴィーノの認識のほうが、直感的ではあるにせよ著者よりも中近世地中海社会の

現実にせまっているように見える。

また、このように著者がカルヴィーノの解釈を批判的に検討していること自体に、アメリカにおける地中海研究のひとつの核心があると考えられる。民族を相対的にとらえて共存を強調し、民族間の対立や相克を否定する点は、本書にかぎらず、近年アメリカで出版された中近世地中海史に関する研究書の多くに共通して認められる特徴である。

そして、アメリカ人研究者が描く民族共生社会は、実際には、現代アメリカの抱える現実にむしろ近い印象を与える。たとえば、本書において著者は、「見かけ」や「身体的特徴」による民族区分を主張して、他者認識の地理的境界を地中海世界の外に設定しており、そしてその境界がどのような地理的領域に一致するのかについても（おそらくは意図的に）触れていない。また、評者が専門とするヴェネツィア海外領土の共生研究を扱ったアメリカ人研究者もまた、上梓した研究書の冒頭において、自らのルーツであるアイルランドが経験した不幸な歴史に対するアンチテーゼとしての、地中海世界研究の意義を強調している。[5] このように現代アメリカにおけるエスニシティの問題を浮き彫りにするためのひとつの道具立てとして中近世地中海研究を位置づけることで、現代アメリカにある何らかの現実と地中海との対応関係を読者に対して示唆するものとなっている。

こうした傾向は単著においてより顕著で、個々の論文を見たときには、こうした相対主義はなりを潜める。おそらくは、研究者自身は実証を志向していたとしても、その成果を「世に問う」際には、学問的関心の充足と社会一般の知的欲求に答えることとの間の十分なすり合わせを自覚的に行わざるをえないのだろう。アメリカで相次ぐ研究書の出版からは、地域研究が困難になるなかで、研究の存続を社会に向けて訴えていこうとする、そのような彼の地における中近世地中海研究の舞台裏も透けて見えてくる。

アメリカの中近世地中海史の動向を追うことは、もはや日本語で論文を書くうえで不可欠な作業である。しかし、本稿で示したとおり、アメリカにおける研究動向にもまたテーマや史料の選択における志向性が存在していることは明らかであり、その「社会学的」「人類学的」な装いの背後にあるアメリカ社会のリアリティを常に念頭に置く必要がある。

① S. A. Epstein, *Wills and Wealth in Medieval Genoa, 1150–1250*, (Cambridge, Mass., 1985).

② Idem, *Wage Labor & Guilds in Medieval Europe*, (Chapel Hill, N. C., 1991).

③ Idem, *Genoa and the Genoese, 958–1528*, (Chapel Hill, N. C., 1996).

③ Idem, *Speaking of Slavery: Color, Ethnicity, and Human Bondage in Italy*, (Ithaca, 2001).

④ I・カルヴィーノ（米川良夫訳）『見えない都市』、河出書房新社、二〇〇三年、二一四―二一五頁。

⑤ S. McKee, *Uncommon Dominion: Venetian Crete and the Myth of Ethnic Purity*, (Philadelphia, 2000), p. 171.

(231×160 mm, pp. xiii+250, 2006, Baltimore: The Johns Hopkins University Press, $58)

（日本学術振興会特別研究員）